

謎多き世界、魅力は尽きません！

# 濁点はどこから生まれしてきたのか？

ボーツと生きている人が多いこの日本。だから、ふだん多大な恩恵を受けているのに、そのありがたさに気づかない人ばかり。そのアナタ、濁点がなかったら、どうするのですか？  
チコちゃん（\*）に叱られる前に、山口謠司さんに聞きました。

大東文化大学准教授

## 山口謠司

●やまぐち・ようじ 1963年長崎県生まれ。大東文化大学、同大学院、フランス国立高等研究院人文科学研究所大学院に学ぶ。ケンブリッジ大学東洋学部共同研究員を経て現職。著書に『漱石と朝日新聞』『カタカナの正体』『日本語を作った男 上田万年とその時代』など。

## 清と濁という考え方

——濁点を「てんでん」というニツクネームで呼ぶと、かわいらしく聞こえますが、濁った点では、あまりいい印象は持てませんね。

清、濁という概念は中国から入ってきました。中国では「白」は、「潔白」を意味し、非常に高く評価

しています。司馬遷が書いた『史記』の最初にある「伯夷叔齊列伝」は孤竹君の公子の三人兄弟の話で、父親は三番目の息子に継がせようとする。しかし弟は兄を立て、兄は弟に譲ろうと、お互い譲り合って、しまいには国を去り、二人とも餓死してしまふ。この話を孔子は美談だと言っています。

世の中が濁っていたならば、自分のために隠れて勉強し、世の中がきれいならば、世の中のために自分の能力を尽くしていく——そういう生活をしたと孔子は言う。公に対して、自分に対しても「潔白」であることを、いちばんいいものとして考えています。そういう思想が日本の文化の中にも入り、日本語にも影響してきます。

\*NHK総合金曜夜に放映されている「チコちゃんに叱られる」の主役。5歳の女の子。何でも知っている。

和歌は絶対に濁点をつけないですね。つけることによって汚れてしまうという意識があるからだと思います。平安時代には、「優艶さ」や「浄化」を求める風潮が強くなりますが、これも中国の思想とつながるところです。濁音で始まる言葉に「きたなさ」や「下品さ」を持つものが多いと、宮中などでは嫌う傾向がありました。

## 宮中では鼻濁音

——平安時代に濁点、濁音というものは存在していたのですか？

庶民の間では定かではありませんが、いわゆる宮中や貴族の間では、発音という意味では存在していなかったと思います。

本居宣長が日本語に濁点はあったのかを、『万葉集』『日本書紀』『古

事記』の中に探していきますが、出てくるのは『万葉集』に収められた山上憶良の「貧窮問答歌」だけだと言っています。この中に「堅塩を取りつづしろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて」という部分があります。「鼻びしびしに」という部分は万葉仮名では「鼻毗之毗之余」と書かれています。私たちが「鼻水をびしよびしよ」と表現するところでしょう。

ちなみに「びしびし」はオノマトペ。このようなオノマトペ以外の言葉には、おそらく濁音はまだ存在していないでしょう。この「びしびし」も現代の鼻濁音よりもさらに鼻にかかった音で、濁音なのかどうかわからないくらい「びしびし」だったと思います。

私たちがいま話している日本語と

違って、当時の人たちの話すスピードはものすごくゆっくりです。僕は、能楽師の家に生まれ、謡をやっていますが、祖父などは、「自分たちがやってた謡は、いま、お前たちがやっている謡よりも三倍くらい時間がかかっていた」と言う。いまなら一時間か二時間で終わってしまうような演目を、四、五時間かけてやっていたそうです。

そこから考えても平安時代はもっとゆっくり話していて、もつと鼻に抜けるように話していたのだと推測できます。ほとんど音としても濁音は出ていなかったんじゃないかと思えます。発音も我々とは全く違う。「たちつてと」ではなくて、「ちやちいちゅちえちよ」と言っています。音としてもゆっくりでないと出ないものが多かったと思いますし、いま私たちが「てんでん」をつけている